

第4講：ひのきしん

堀内みどり Midori Horiuchi
八木 三郎 Saburo Yagi

【教理編】

堀内みどり

『改訂天理教事典』は、「天理教信者の積極的な神恩報謝の行為を、すべて『ひのきしん』という」と述べる。また、『天理教教典』は、「日々常々、何事につけ、親神の恵を切に身に感じる時、感謝の喜びは、自らその態度や行為にあらわれる。これを、ひのきしんと教えられる」とまとめている。このように、「ひのきしん」は、天理教の信仰者にとって、親神の守護を身心に体感し、また得心したその喜びの表現（時には存在そのもの）、行為（身をもって行うこと、話すこと、思い考えること）すべてを意味している。

それは、「かしのもの・かりもの」の教えに目覚め、親神の守護があって、自分は生かされているという自覚の実践となっている。「みかぐらうた」は、

ひとことはなしハひのきしん
にほひばかりをかけておく (み7:1)
ふうふそろうてひのきしん
これがだいゝちものだねや (み11:2)
よくをわすれてひのきしん
これがだいゝちこえとなる (み11:4)

と、教えている。「ひのきしん」は、「よく」（我欲）を忘れた行為であって、夫婦（あるいは家族、友人・知人、信仰の仲間など）が共に、親神に向かって行うことにその醍醐味がある。そうした姿は、自発的な行為・態度であって、「自利」ではなく、「感謝」によって支えられている。それが「にほひ」となって、喜びを他に伝えることにもなる。

「ひのきしん」は、①ぢばでの労働奉仕（土持ち／「おやさ」とふしん「おやさ」とひのきしん）、②おやさとにおける信仰教育の場で（天理教校別科／修養科、管内教育機関）、③地域組織・地方教会（一般公共施設、災害地など地域社会に対する「ひのきしん」は、天理教信仰にもとづく「たすけあい」）、③全教一斉ひのきしんデー・災害救援ひのきしん隊、といった形で行われてきている。

また、神殿の回廊を拭くという姿を私たちは日常的に目にするが、それは信者一人ひとりが親神に向かっている姿・信仰実践であると思う。

『ひのきしん叙説・たんのうの教理』（諸井慶徳、道友社、昭和38年）の序で、2代真柱は、「ひのきしんは天理教運動の一表象となってきた」「私たちの信仰文化がひのきしんによって益々築かれてゆく事を信ずる」と述べる。まさに、「ひのきしん」が真に「ひのきしん」であるということは、天理教の「行為の在り方を「ひのきしん」によって表現し、信仰的自覚つまり幸福、この道のつとめ方を示している。同時に「はたらく」ことの天理教的な様態となっている。諸井は「心のこもった働き（つとめて事を行うこと、心身をつかい為すこと）は、「働きかけ」となり、相共に助け合い喜びを与え合う世界、人の為に「働き」させようという親神の思いを実現していくと述べる。

（会場での質問「みかぐらうた第一節の短い文章の何処に人間創造の理を言い表す言葉があるのか」（堀内要約）について、①に「みかぐらうた」は手振りと共に受け取ることが大切、②かぐらづとめで19回、20回、21回では「たいしょく天」の手も振られ、つとめ人衆が人間創造の理を表されていることをお伝えしようと思いました。）

【展開編】 ひのきしんの実際

八木三郎

ひのきしんの歴史的展開

「ひのきしん」の言葉は、慶応3年の「みかぐらうた」にみられる。その「ひのきしん」の最初の事例としてあげられるのが、本教の歴史の上で忘れることのできない元治元年（1864）の「つとめ場所」の普請である。

それは、後に本席となる飯降伊蔵氏が元治元年に妻の産後の患いを救っていただきたいと、初めておぢば帰りの時の話である。すっきりご守護をいただかれたお礼に社の献納を思いつき、教祖に進言したその結果「つとめ場所」の普請へと繋がるのである。

このつとめ場所の普請で、お屋敷のなかは連日にぎわいをみせていたが、棟上げが行われた後に、信者たちが大豆越村の山中忠七氏の自宅に行くその道中で「大和神社事件」が起こった。その事件以来恐れをなして離反する信者が相次ぐなか、飯降伊蔵氏はどこまでも救っていただいたお礼の心でひたすらつとめ場所完成へと誠実の心で通られたのである。これが、本教のひのきしんを語る上で重要な一つの事例である。

おぢばにおけるひのきしん活動は、明治14年（1881）の「かんろだい」の普請、明治25年（1892）の「教祖墓地改装工事」などがあり、全教あげて「土持ち」を中心とするひのきしんが展開している。ひのきしんの歴史は、そのまま普請の歴史でもある。神殿普請、教祖殿普請、また現在のおやさと普請に至るまで、10年ごとに行われる教祖の年祭を契機に全教信者のひのきしん活動は普請とともに今日まで展開してきた。

そのなかでも、明治42年（1909）に開設された天理教校別科では、実行科と信念科が創設され天理教教師の養成が精力的に行われている。後に、実行科が「ひのきしん科」となりひのきしん活動が重視され、強力に推進された。

また、昭和16年（1941）に改制された修養科では、朝夕の神殿ひのきしん、午後の授業でひのきしんの時間が設けられるなど信仰教育の上でひのきしんの重要性が示されている。

一方、地域社会におけるひのきしんとしては、明治18年（1885）に大阪の淀川の堤防工事、明治20年（1887）のウテナ橋（旧大県詰所近くの布留川）の工事などでひのきしんが行われている。これ以降も、明治20年代の大阪や奈良県下各地で行われた道路開墾工事へのひのきしんから始まり、風水害、地震災害時に復旧救援活動として「ひのきしん隊」が編成されている。歴史的にも多くの信者たちが社会的に密接な関係を持ち、各地の街道の開墾工事に精力的にひのきしん活動を展開している。それは、街道を開墾することがお道の教えをひろめることに繋がると信じて行われたのではないかと推察する。

また、明治、大正、昭和の時代における戦時下では、国家の要請をうけて、「労働奉仕」の形でさまざまなひのきしん活動が展開している。当時と現在では時代背景も大きく異なり、厳密な意味ではひのきしんのありようも異なる部分があるが、天理教の草創期から今日に至るまで社会への貢献活動としての役割、位置づけのもとに「ひのきしん」は存在し、「天理教といえば、ひのきしん」と注目されてきたのである。